

## 「第4回語り場」のやや詳しい報告

2021年12月4日(土)13:30~15:50に開催した「第4回語り場」のやや詳しい報告です。

今回は初めての参加者が2名であったことから、仁徳地域商会の設立経緯の説明はせず、出席者の簡単な自己紹介から始めました。参加者は、会場が全員で14名、ZOOMによる参加が2名でした。

まず初めに、会員の白松博之さんが「耕作放棄地を、有効活用したい～地域活性化にオリーブ栽培を始めたら～」と題して、2016年から阿武町の耕作放棄地等で取り組んでおられるオリーブ栽培について、お話しくださいました。山口県の中では結構雪の多い阿武町ですが、海に面した耕作放棄地であればオリーブ栽培はできると、NPO法人まで設立して取り組まれたのです。



オリーブ栽培といえば、小豆島や南欧の暖かい地域の作物というイメージが強いのですが、地植えなら-11℃まで大丈夫だそうです。とはいえ鉢植えではダメなのだそうです。多くの疑問視する人たちをよそ目に、まずご自分の畑で12品種の試験栽培から始められます。寒いと言われている阿武町で栽培できる品種は、果たして鳥獣被害は大丈夫か、農薬を使用しない栽培は可能かなどについて検証されます。その結果、ミッション、フランドイオ、ルッカ、シプレッチーノといった4品種を選定され、オリーブは渋みが強いため、カラス、猿の被害はないが、猪については堆肥中のミミズを食べにくるため困っているものの、農薬を使用しないでも栽培は可能だということで、白松さんの挑戦は、次の段階に進みます。

かつては美しい棚田だったが、現状は荒廃した耕作放棄地をオリーブの里にしようと、地元の高齢者に話をしたが賛同してもらえず、Iターンでやってきた新規就農者の幾人かが賛同され7か所50本の苗木で栽培試験を始められたそうです。当初はしっかり管理をされていたものの、ほとんどが失敗だったそうです。タダでもらったものに本気度は生まれなかったのだそうです。それでは自らが自腹で取り組む必要があると、山口県が実施していたソーシャルビジネスプランコンテスト「ぶちCONやまぐち2018」に応募されます。見事「準グランプリ」を受賞され、賞金100万円を取得されました。この賞金と自己資金を用意して、

「NPO 法人やまぐちオリーブ協会」を設立されました。

かつてはイノシシの菟場(ヌバ)だった 10 年以上放置されている耕作放棄地に、重機を入れて、排水対策と畝作りを行い、2019 年 2 月に 400 本のオリーブを定植されました。特許庁に勤務したことのある人や造園技能士の方も NPO 法人に参加され、定植方法や剪定方法の工夫による特許権を出願されます。通常 1 a 当たり 4 本のところを 20 本植え、通常 1 本あたり 10kg 程度の収量のところ 20kg の収量を得られるようにされました。このような特許の出願と並行して、栽培パートナーを募集されます。最初に応募してこられたのは、埼玉県行田市の障害者施設の法人でした。障害のある人も収穫しやすいよう樹高 2m に抑える工夫をしたり、作業工程を分かりやすくしたマニュアルを作成したりと、きめ細かな対応をされてこられました。農福連携が叫ばれている今日、福祉施設における耕作放棄地でのオリーブ栽培は、サポーターの協力も得られれば、うまく事業として成り立つのではと感じました。

特許利用料は、個人で 20 万円、法人 50 万円だそうです。別に技術指導料や旅費実費が必要となります。行田市に続いて、山梨県笛吹市や愛媛県八幡浜市、愛知県大府市、また山口県では美祢市の方とも特許使用契約を交わし、栽培パートナーができたそうです。今ではなんとか NPO 法人の運営経費程度の収入はあるそうです。なおこの NPO 法人が提供されるサービスは、①オリーブ苗木の販売②オリーブ栽培技術指導③特許実施権となっているそうです。

2019 年 2 月に定植したオリーブは、順調に生育し 2020 年秋には早くも結実しました。早速、簡単な搾油機をご自分で考案製作され、(本格的な搾油機は、大変高価で、負担がとて大変なため)、オリーブオイルの製造販売に着手されます。NPO 法人の会員には東京都在住の方もおられ、国産で農薬不使用のオリーブは、都市部ではいくらかでも需要はあるとのことでした。日本のオリーブの自給率はわずか 0.03% だそうです。国産といえば小豆島産が多いのですが、小豆島では供給が追い付かないため、小豆島で買っても外国産のものが多いのだそうです。

オリーブ栽培で失敗すると寒さが原因と思われがちですが、実際は排水不良やオリーブアナアキゾウムシが原因であることが多いそうです。根の酸素要求度が高いため、大雨時に半日でも根が水に浸かるとダメで、畝を高くする



などして、大雨でも冠水しない排水対策が必須だそうです。オリーブアナアキゾウムシ対策としては、オリーブの木の根本をきちんと剪定しておくようにとのことでした。白松さんたちの研究は続きます。肥料比較、根切り、土壌改良の比較調査を、引き続き行っておられます。

耕作放棄地といえども元が田であれば、勝手にオリーブ畑にはできないそうです。素人的には、放置されて利用されていないのだから、オリーブ畑として活用することは、無条件でできると考えてしまいます。ところが農地には農地法の適用があり、農地法に則り対応しなければならないようです。耕作放棄地の周囲の所有者に同意を得た上で、農業委員会の許可をもらわなければ、オリーブ畑に転用はできないのだそうです。あれだけ米の転作が求められている時代、もっと柔軟に対応できるようにすべきではと、勝手なことを考えてしまいました。

最後に白松さんは、「皆さんも、オリーブ栽培を始めませんか」「皆さんも、厄介者の耕作放棄地を有効活用しましょう」と呼びかけられました。農業 GDP 最下位を死守している山口県が、耕作放棄地の有効活用により、小豆島と並ぶ、オリーブ生産の一大産地となる日がくればいいなと思わせる発表でした。白松さん、ありがとうございました。

次いで仁徳地域商会の役員で地域資源再生開発研究所の事務局長である市原茂さんが「地域資源再生開発研究所について」と題して、令和3年(2021年)7月28日の発足以降の取組と地域資源再生開発研究所について話してくださいました。地域資源再生開発研究所の略称として「R2Dラボ」(「Resource Reproduce Develop Laboratory」)とされています。

まず「R2Dラボ」は何を目指しているについて話されました。今ある地域資源を掘り起こし、地域の困りごとに寄り添い、それらに関連した事業を創り出し、生き生きして豊かな持続可能な地域づくりに貢献することだそうです。

当面の具体的な事業として、①まつたけ再生・復活事業②よろず相談事業(生活弱者対応)を挙げられました。

仁徳地域商会との関わりについての説明もありました。1つは、情報交流とその活用等による仁保地域と徳地地域が協力し合って地域づくりを進めることで名付けた名称を持つ仁徳地域商会の一翼を担うことだそうです。2つ目は、協力関係として、特に人材不足の補強としての役割を果たすことだそうです。当然のことですが、出資関係はありません。

次に今までの取組について言及されました。

令和3年(2021年)7月28日に、設立総会を開催され、8名で正式に発足されました。続いて定例会議は今までに2回開催されています。素晴らしいのは徳地の中心地の堀に空き店舗を見つけられ、なんと拠点として借りるようにされたことです。まだ殺風景な内部ですが、コロナ禍が収束すれば、十分、語り場を開催することができる広さです。備品も順次揃えられ、その実行力のすごさにひたすら感服です。



続いてまつたけ山(37.99ha)の入札に参加されます。見事、最低価格に近い金額で落札されました。2021年11月末までに、5回入山されますが、今年は天候の影響もあり、今のところまつたけの収穫は成果なしだそうです。協力者の助言により「山口県元気生活圏元気創出事業」に応募され、見事、採択されたそうです。3年間、毎年25万円の助成が受けられます。この助成金を使って、山を整備するための道具を揃えるとのことでした。県林業技術センターにまつたけの専門家がいらっしゃるということで、早速、まつたけ山づくりについてご教授を受けに行かれます。



なお先ほど発表された白松さんから「まつたけの生えそうなところに、もったいないがまつたけを植え、傘から胞子を放出させれば、次の年その周辺にまつたけが出てくる。夢のある話であり、車いす生活になった私は山に入ることができなくなったので、私に代わってぜひ成功させてほしい」といった温かいエールもありました。近くにもまつたけの専門家がいらっしゃる、思いがけない出会いでした。また白松さんから、市民の方々に山に入ってもらうためには、キノコ狩りなどのイベントを開催されるといいといった助言もありました。世の中には色んな人がいるので、まつたけが出るかもしれないといったようなことは口外されない方がいいといった助言もありました。

隣の町である島根県津和野町で開催されている「つわの蚤の市」に出店されたそうです。徳地地域にある「ゆめ工房」さんの商品を中心に展示し販売されました。特に、「竹かご」「竹とんぼ」がよく売れたそうです。「ゆめ工房」さんには素晴らしい商品はあるものの在庫が相当数あるそうです。このような地域に眠るいいものを世に出そうということ



で、「R2Dラボ」が取り組まれたのだそうです。徳地には様々な人材や素材がありますので、今後の展開がとても楽しみです。

続いて運営方法についての説明がありました。

**会員は全て対等で、全員が経営者、上下関係や忖度は全くないことを大原則と**されています。そのほか次のような原則に基づいて運営することにされています。

- ・ 決め事は全て会員の話し合い、合意で決める
- ・ 運営の仕方も会員が話し合っで決める
- ・ “出来ることから、出来る人が、出来るときに” が活動の原点
- ・ 収支状況は常にオープンにする
- ・ 報酬があれば会員の話し合いで決める
- ・ 知りえた情報は開示し、隠し事が無い透明な運営とする
- ・ 役員（代表1名、監事2名、事務局1名）は、話し合いで決める

とても魅力的な団体なのですが、どうすれば会員になれるかということで、次の条件を挙げられました。

- ・ R2D ラボの趣旨に賛同される方
- ・ 老若男女を問わない
- ・ 一定額の出資（入会金、年会費）に承諾を頂いた方
- ・ 徳地地域に居住している必要はない
- ・ 地域活性化に貢献したい気持ちがある方
- ・ 新しいことに挑戦する気持ちが強い方
- ・ いつでも入退会できる
- ・ 退会時における出資金は原則返却しない

そこで入会金や年会費はいくらのかとお尋ねしました、入会金が10,000円で年会費が3,000円だそうです。入会希望の方がいらっしゃいましたら、ご一報ください。市原さんへ繋がります。

最後に、「まつたけ再生・復活事業」の進め方についての説明がありました。

まつたけ再生は「上手く行く」と言わずに「**上手く行ったら良いな**」ぐらいのゆるい気持ちで取り組むが大事だとおっしゃいました。その上活動の基本は、「**里山を守り、豊かな自然を次世代に繋げる**」ことだと言われました。

事業のスケジュールとしては、次のようなことを計画しておられます。

- ・ 活動開始～5 か月目 まつたけ山適地の選定、地元集落への承諾・協力依頼、各種備品の調達
- ・ 4 か月目～9 か月目 山道の整備、休憩所・トイレの整備
- ・ 5 か月目～7 か月目 活動の情報発信

・7か月目～10か月目 まつたけ講師による研修（2回）  
山仕事講師による研修（3回）

最初に構想をお聞ききした時、どのような展開になるのだろうと、疑心暗鬼でしたが、着実に一步一步前進しておられ、とても素敵な団体になってきているなと感じました。市原さん、発表お疲れ様でした。

語り場に参加された会員の庄さんがFacebookに「白松さんと市原さんの地域再生、活性化にかける語り。笑いの中にも核心を捉えたノウハウがある、とみました」と投稿されていました。お二人の話の的確に捕らえておられ、さすが庄さんだと感心させていただきました。

今回は、会員の富田さんが柿チップを、会員の松田さんがシシ鍋をご準備くださいました。とてもおいしくいただきました。ありがとうございました。

発表された方をはじめ参加された皆さん、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

